

深イ〜話!

No.70

—藤尾英昭の「小さな人生論」より—

一沈一珠——

「いっちないっしゅ」と読みます。

この言葉は、青森在住の木村将人さんから教わりました。

木村さんは長い間、青森県各地で中学校の教師を務められた方で、実によく子供たちを指導された方です。木村先生の教育論を伺っていると、こういう先生に中学時代に教わった子どもは幸せだなあと思います。

その木村さんが随分前に出版した自著のタイトルが「一沈一珠」でした。

その本の中で、木村さんがこのようなことを書かれています。

木村さんが大学生の頃のことです。

数日間2人1組でアルバイトをしていた相棒と一緒に布団を並べて天井を見ながら、朝まで語り明かしたことがあるそうです。

大学浪人のその相棒は木村さんに、こんな話をしたといいます。

「自分は母一人子一人の身なのだが、きっと大学に入って母を安心させてやりたい。

そして卒業して仕事について母を楽にさせてやりたい」

そして、こう続けたといいます。

「自分は小さい頃から、一沈一珠という言葉がいつも心の中でかみしめながら、頑張ってきた。あの海女が、いったん海に潜ったら、どんなに息が苦しくなっても、一個の真珠を見つけ出すまでは決して浮上しない、というところから、この言葉はできたらしい。

自分はいままで何度もつらい思いをしてきたけれど、この言葉を思い出し、生きてきた」



一夜、いろんな話をしたはずだが、覚えているのは、この話だけと木村さんは言ってます。

翌日、最後の仕事を終えて給料をもらった木村さんは、その給料を全額袋のまま、その相棒に渡し、逃げるように立ち去ったといいます。

木村さんの人柄をそのまま表したような逸話です。

一沈一珠——。

海女は一度深い海に潜ったら、1つの真珠貝を見つけるまでは、どんなに苦しくてもあがってこない。私たちも人生の中で様々な体験をしますが、どんな体験の中からも必ず1つの真珠貝を見つけ出していく、そういう生き方をしたいものです。